

氏 名	浅川 希洋志 (あさかわ きよし) 教授
こんな研究をしています	1. 最適経験 (optimal experience) といわれるフロー経験 (flow experience) と精神的健康・psychological well-being の関係について。 2. 異なる文化で育った人々はフローを同じように経験するのだろうか。 3. 生理学的指標でフロー経験をどう測定するか、できるのか。
こんな成果を挙げています	1. “Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?” (<i>Journal of Happiness Studies</i>, 11, 2010). 2. 「楽しさと最適経験の現象学—フロー理論—」鹿毛雅治編『モチベーションをまなぶ12の理論』金剛出版 (2012年)。 3. “Universal and cultural dimensions of optimal experiences.” (共著: with M. Csikszentmihalyi) (<i>Japanese Psychological Research</i>, 58, 2016). 4. (監訳) チクセントミハイ『クリエイティヴィティーフロー体験と創造性の心理学』世界思想社 (2016年)。 5. 「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したもの」『心と社会』第53巻第2号, 日本精神衛生会 (2022年)。 6. “Dispositional flow and related psychological measures associated with heart rate diurnal rhythm” (共著) (<i>Advanced Biomedical Engineering</i>, 12, 2023).
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	文化と心の働きに関する研究: 異なる文化で育った人々は、同じ場面で同じような心の働き方や経験をするだろうか。学校教育は文化の担い手としての子どもたちにどのようなことを期待し、教育プロセスの中で、子どもたちはどのような心の働き方を身につけていくのか。
こんな授業を行なっています	「異文化社会論 IIA/B」: 文化心理学の立場から心の働きと文化の関連について学ぶとともに、異文化社会/多文化社会における適応とはどういうことかを考えていきます。また、受講者が自分自身の異文化体験に対する考察を深めていくための一助となるような授業になればと考えています。
学会や社会でこんな活動をしています	所属学会: 日本心理学会、American Psychological Association、International Positive Psychology Association、European Network for Positive Psychology。 小・中学校の教育研究のサポート、企業内メンタルヘルス・モニタリング・システムの構築、フロー理論を用いた起業家教育プログラムの検証、「ワーケーション」の効果と可能性の検証、フロー経験と心拍数との間にどのような関係があるのかを明らかにする取り組みなど、様々な活動、研究に携わっています。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	中村 哲 (なかむら・てつ) 氏: 1946 年福岡県生まれの医師。国内の病院勤務を経て、1984 年パキスタン北西辺境州、現在のカイバル・パクトUNKワ州の州都ペシャワールのミッション病院ハンセン病棟に赴任し治療を始め、そのかわり難民キャンプでアフガン難民の一般診療に携わる。1989 年よりアフガニスタン国内へ活動を広げ、山岳地帯医療過疎地でハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の診療を開始、2000 年から干ばつが厳しくなったアフガニスタンで飲料水・灌漑用井戸事業を始め、2003 年から農村復興のため大がかりな水利事業に携わる。2019 年 12 月 4 日、アフガニスタン・ジャララバードで武装集団に銃撃され、命を落とす。 中村氏は国や文化を越え、医師として、人として、様々な問題を抱えるアフガニスタンで懸命に生きる人々に寄り添い、生きた人物です。「困った人がいたら手を差し伸べる…それは普通のことです」という彼の言葉に、国際社会人の本質があるように思えます。